



京都へ帰った親鸞さま

「浦島太郎」

昔昔 浦島は
たすけた龜に連れられて
竜宮城に 来てみれば
絵にも描けない うつくしさ

もう一つ前にも似たような歌詞の「うらしま」があつた。そうだが、学校で教えられた覚えはない。こっちの「文部省唱歌」は、美しい絵本の絵とセットで幼いわたしの脳裏にやきついている。

厳密な一つ一つのことばの意味などは考えないまま覚えこんでしまつていて、おとなになつてベンダナと思いつたりもした箇所がいくつかあつた。例えば、第四節。「帰つて見ればこはいかに 元いた家も村もなく路に行きあう人々は 顔も知らない者ばかり」

「こはいかに」（これは一体どうしたことか）が子供にもわからなかつた。「怖い蟹！」つてどんな蟹がいたのだろうか。

でも、なんとなくその浦島の寂寥感・虚無感はわかつたものである。

帰つてまた京都には。

親鸞さまが、家族を伴つて関東から京都へ帰ってきた（234又暦元年）のは何のためか。

師の法然さまは、親鸞と一緒にいわゆる2007年（承元の法難）で土佐へ流罪になつてゐたが、親鸞四十歳の頃、赦免ご帰郷と聞いたのも束の間、大阪で亡くなつてゐる。

しかし、都では法然の庇護者だった後白河法皇や関白九条兼実の勢力は1221（承久の変）で一掃され、以後、ますます念佛弾圧は激しくなり、法然の墓さえ暴かれ、隆寛律も次々に流罪にあつたり、流刑先で死去してしまつた。法然さまの著書『選択本願念佛集』の版本さえ比叡の悪僧たちに焼却されてしまっていた。法然さまのご遺骸でさえ掘り起こされれる始末。年忌法要でさえ念佛唱和の儀式は禁止され、天台・真言の方式作法で世間に隠れて嘗まれる有り様で、表立つて念佛をとねたり法座を開くなど、とてもかなわぬ状況であった。

前述の通り、その当時、地震・竜巻・大火災・飢饉など相次ぎ、京都市街の様子も荒涼たるものであつた。その中に親鸞さまは家族を伴つて帰ってきたのであつた。

「道に行きあう人びとは 顔も知らない者ばかり」

一人で学び、

孤独な親鸞は、その孤独のなかから法然さまの遺訓や思いでをまとめてみようと思いつた。いわゆる『西方指南録』（上・中・下巻）の編集作業であった。あるいはひそかに師法然さまから教わつた仏道を、『愚発録』や『入出二門偈』など、ひとりひそかに整理復習してみるのであつた。

なにしろ当時京都という街は、ことに念佛禁制の嵐が吹き荒れ、念佛の道を語り合う人

とて一人もいないばかりか、「法師」「僧」と名乗るひとでさえ、加持祈祷をなりわいとしたり、「僧兵」と称して、数珠もつ手に武器を携え、大寺の僧や権力者の輿（こし）を

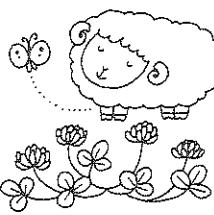
かいたり、むしろ仏道をあゆむひとを殺戮するなど、云うも語るも「うきことなり」と親鸞は、自己を含めて悲嘆している。

京都市内は、かの一二二一年の「承久の変」（後鳥羽上皇など隠岐へ流す）以来、公家貴族は急速に衰え武家の世になりつつあつたし、全国各地に天変地変相次ぎ、餓死する人も多く、「田舎」では、例の「大化の革新」以来の統治組織であった律令制はくずれ、公地公民制を基盤にした「班田の法」はもはや有名無実。ことに西国では鎌倉幕府の布いた「ご家人制」とはまたちがつた地方豪族たちのいわゆる「大名」による「領国支配」が急速に進んでんできていた。大名・領主支配が一般化するなか、そこからはじき出された逃散人（とうさんじん）浪人・遊民が都に大量流入し、「惡党」「下人」とよばれ差別されながら、寺社の隸属人、「犬神人（つるめそ）」となり芸能をうる「傀儡（くぐつ）・人形使い芸人」、「餌取り」（えとり）・渡し・馬子・狩人・盜人・獵師・網ひくもの・人賣い・白拍子など等。社会の底辺を生きる人達が階層をなしてうごめいていた。これらあさましい「業」（ごう）を背負つてそれでも生き続ける「田舎人（いなかびと）」たちが、むしろ親鸞さまの「御同朋」であつた。

親鸞も、生活財政は苦しく、暫くは関東のお同行からの寄進や、弟義有（じんう）天台の学僧（ごく）の援助に支えられていたがそれにも限界があり、孫（如信）一人を膝もとに置いて他の妻子は越後（妻、恵信のふるさと）へ帰さねばならなかつた。火災にも会つたし親鸞自身、社会の底辺で生きなければならなかつた。身から出たさび」。身

を切る辛さの日々であつたに違ひない。その中で親鸞自身、我が身わが信心を省みる。千部読誦の功で祈ろうとしたではないか。自力を排し如来の他方に帰依する念佛の教えにそむいたのは外ならぬ親鸞私ではなかつたのか。ことに関東念佛教団のなかに異議異端の旋風をまき起こしたのは、親鸞の実子善鸞であつた。あれを思いこれを考えると、とても「師」と仰がれる親鸞ではない。

淨土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし 虚偽不実のわが身にて 清淨の心もさらになし



親鸞さまは、そういう浅ましい仲間にさせられ、そうした末代濁世を生きる人達と、その「苦惱」と「救済」を語る以外になかつた。

親鸞さまは、そうした人達に「念佛」を進めた。先ず、「帰命尽十方無碍光如來」

「南無不可思議光如來」
「南無阿彌陀佛」

九字・十字・六字の名号を頒布した。

今に残つてゐる真筆は、後に本山とよばれるいくつかの寺院に伝えられているものだけであるけれども、実際は、「田舎の、文字のころも知らず、愚痴きわまりない人々に」多く書き与えたものであろう。

「ただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべし」と、よきひと（法然さま）の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

（歎異録）二

誰彼かまわざ親鸞はこう語り続けた。

慈悲

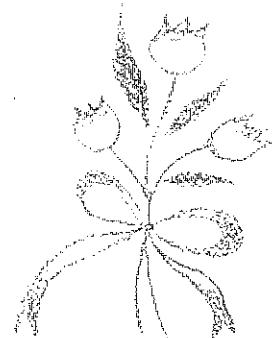
マイトリー（友として）・カルナー（呻く）。直訳すると、（友として呻く）。「人の身になって思いやるところ」。中国では「拔苦・与樂」（他者の苦しみを抜き、樂を与える」と訳した。「人の身になって呻き悲しむ」が一番原義に近いと思われる。

如来（にょらい）

サンスクリット（梵語・インドの最も古い仏教語）では「タッター・ガーター」。「眞実・如実」から「来る（さる）」意。

眞実・眞如から迫つてくる力・働きであつて、仏像などのような偶像ではない。

浄土真宗で如来というのはだから彫刻の仏像や絵に描いた画像のような偶像ではなく、「大願業力」（わたしにかけられた眞実のはたらきかけ）。（眞実の親の願いの呼び声）。「南無阿弥陀仏」（「名号」）。



葬儀

五月七日

鉢山 足立ふみ子様 八五歳

榎見 湯口 長一様 八二歳

壇家制度

「壇家」（だんか・だんけ）とは「壇那の家」です。寺の經營護持発展の為にダーナ（布施）をする家。

江戸時代になると寺寺は、家族制度を基本にした『寺請人別組織』を作つて行きました。それが次第に社会的な寺の勢力条件にもなつて行きました。

幕府はこの寺の「本山末寺制度（本末制）」といいます）を上手に利用して幕府の統治を

かため、また「宗門改め」・「人別帳」など、今で云う『籍簿を作り、「キリスト教」弾圧「禁教令」をはじめ、家柄・職業・身分・部落による差別支配を利用しました。その人別帳の管理を在地の寺院に請け負わせ人民統制をさせました。これを『寺請制』と云います。

寛永年間（1600年代）（徳川家光代）。寺はかくして、身分差別支配を請け負わされ『檀家制度』はかくして差別的人民支配の根幹に組みこまれました。この政策を批判抵抗したのでしょうか当時の勝林寺住職は民間人としては最初に「八丈島」へ流人として送らされています。

門信徒会運動

門徒は「家」や、まして「寺」に所属しているものではありません。個々の一人一人が如来さまの教えを聞いていくのが基本であるはずです。家族や家柄とか伝統に縛られないで、「同行・同朋（おなじ道を歩むきょうだい）」として互いに聞きあい学びあいましょう。このモットーに始まったのが「門信徒会運動」です。「門徒推進員養成連続研修会」（連研）。この運動を進める人が参加する研修会です。本来の一人一人が平等な人格をもつ

て「門徒」に帰つて、改めて教えを聞こうといふ研修会です。

「お正信偈」に「道俗時衆共同心」（僧侶生きる人達が一緒に）と願われた親鸞さまの跡を慕つて。

といわず一般人といわば、みんなこの時代を生きる人達が一緒に）と願われた親鸞さまの跡を慕つて。

掲示板

人は落ち目になると
自己弁護がうまくなる。

人をけなし 差別して
自分の威を 張ろうとするものだ。

六月 勝林寺 予定

| | |
|--------|--------------|
| 一日（金） | 本覚寺 永代經 |
| 三日（日） | 福成寺 前住七回忌法要 |
| 三日（日） | 出石組 総代会合同三役会 |
| 九日（土） | 斎藤義弘宅 一周忌 |
| 九日（土） | 足立幸夫宅 忽明法要 |
| 一〇日（日） | 仲田たみ子宅 一周忌 |
| 一〇日（日） | 出石組 仏婦総会 |
| 十一日（月） | 組長副組長研修会 |
| 十六日（土） | 平野秀雄宅 三十三回忌 |
| 十六日（土） | 兼井征夫宅 七回忌 |
| 一七日（日） | 斎藤庄治宅 七回忌 |
| 一九日（火） | 西方寺 永代經 |
| 二〇日（水） | 福成寺 永代經 |
| 二二日（木） | 出石・但東仏教会総会 |
| 二三日（土） | 納骨研修旅行 |
| 二四日（日） | 納骨研修旅行 |
| 二六日（火） | みのりを聞く会 |
| 三〇日（土） | 坪木隆晴宅 二三回忌 |
| 三〇日（土） | おみがき清掃奉仕 |



勝林寺 納骨研修旅行

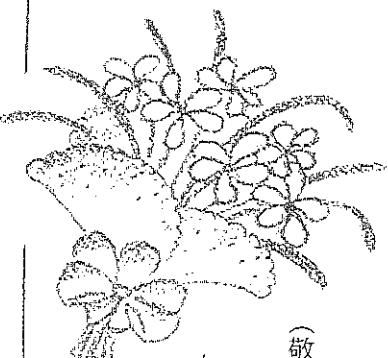
ご案内

京都西本願寺
境内の浦・宮島の方

今年も、納骨研修旅行にみんなで参加しましょう。

旅行日程： 平成24年6月23日（土曜）～24日（日曜）

まだ間に合います！2次締切りは、6月10日です



(敬称略)

| | |
|--------|------------|
| 二六日（火） | みのりを聞く会 |
| 三〇日（土） | 坪木隆晴宅 二三回忌 |
| 三〇日（土） | おみがき清掃奉仕 |